

令和4年度学校経営計画

1 学校教育目標

自立と社会参加を目指し、明朗で協調性に富む、健康な児童生徒を育成する。

校訓 「明るく 仲よく 元気よく」

2 学校の特徴

- ・ 知的障害や肢体不自由のある児童生徒を対象にした新川地域唯一の特別支援学校である。児童生徒の約8割は自宅から通学しており、その他は隣接する児童福祉施設から通学している。
- ・ 小学部・中学部・高等部のほか、通学して教育を受けることが困難な児童生徒のために訪問教育を開設している。
- ・ 医療的ケアを必要とする児童生徒に対しては、教育活動への適切な支援を行うために看護師が配置されている。
- ・ 将来の生活に向けて、自立とよりよい社会参加ができる児童生徒の育成を目指し、個別の教育支援計画及び個別の指導計画に基づいて指導を行っている。
- ・ 校内実習や就業体験、関係機関等との連携を通して、卒業後の豊かな生活を目指した職業教育や進路支援に努めている。
- ・ 関係機関等と連携して早期からの教育相談を実施するとともに、小学校・中学校・高等学校への支援等では、特別支援教育コーディネーターを中心にして新川地域における特別支援教育のセンター的役割の充実を図るよう努めている。
- ・ 学部や学年の行事を通して社会的な体験を積むとともに、近隣の幼稚園、認定こども園、保育所、小学校、中学校、高等学校及び地域の方々との交流する機会を大切にしている。

3 学校の現状と課題

(1) 現状

- ・ 年々、児童生徒の障害の重度・重複化、多様化が進んでおり、医療と密接な連携を必要とする重度の肢体不自由のある児童生徒や医療的ケアを必要とする児童生徒も在籍している。
- ・ 児童生徒一人一人の状態や教育的ニーズに応じた指導の充実を図るため、学校・保護者・隣接する児童福祉施設等が協力して個別の教育支援計画の作成や情報共有を行うようにしている。
- ・ 児童生徒が集団の中で主体的に活動したり、それぞれの能力に応じた学習に取り組んだりできるように、教員のICT活用能力を推進する必要がある。
- ・ 児童生徒一人一人の社会的・職業的自立に向け、キャリア教育の理解や推進を図っている。
- ・ 新川地域の特別支援教育のセンター的役割を果たすことが求められており、小学校等への支援に積極的に取り組んでいる。
- ・ 新型コロナウイルス感染症対策を講じながら、小学校・中学校・高等学校・地域との交流及び共同学習を継続して実施している。

(2) 課題

- ・ 障害の程度や発達段階等に応じた指導の充実
- ・ 家庭や隣接する児童福祉施設等を含めた関係機関とのさらなる連携
- ・ ICTを活用した児童生徒が主体的に取り組む学習指導の充実
- ・ 多様なニーズに応じた進路指導の充実
- ・ 特別支援教育のセンター的機能の一層の充実
- ・ 個性を尊重し、健康で安全な活力ある学校生活の推進

4 学校教育計画

項 目		目標・方針及び計画	
1	学習活動 重点1	目標	<ul style="list-style-type: none"> ・ 集団の中で一人一人が、主体的に取り組む力を培う学習指導の充実 ・ 集団生活の中で自分の役割を知り、自立した生活につながる学習指導の充実 ・ 児童生徒の主体的・対話的で深い学びを実現するために、教員の日常的な学び合いや授業力の向上
		計画	<ul style="list-style-type: none"> ・ 育成を目指す資質・能力の三つの柱に基づいて、「主体的に取り組む姿」の解明を目指し、授業を通して検討していく。 ・ 各教科の学習指導要領のポイント、観点別学習状況評価等についての学習会を行う。 ・ 互見授業週間（2週間程度）を実施し、授業者は目標や評価規準、参観チェックポイント等を記載した互見シートを作成して授業に臨む。 ・ 観点別学習評価に基づいて「授業づくり・授業参観シート」を活用しながら、主体的・対話的で深い学びの視点を踏まえて授業づくり・授業改善を行う。
2	学校生活	目標	<ul style="list-style-type: none"> ・ 児童生徒の手洗いに関する技能向上と定着
		計画	<ul style="list-style-type: none"> ・ 手洗い週間を年3回実施する。
3	進路支援 重点2	目標	<ul style="list-style-type: none"> ・ 生徒が自己理解を深め、主体的に進路選択ができるための進路指導の充実
		計画	<ul style="list-style-type: none"> ・ 校内実習・就業体験などの体験的な活動後に、自分を振り返る機会を設ける。 ・ 進路ガイダンス等の学習会を実施し、生徒に情報提供をする。 ・ 生徒自身が校内実習、就業体験を通して自己理解を深めたり、教師が気づきを促したりするための視点（ポイント）を検討し、事前・振り返りシートを作成し、それを用いて事前及び事後に面談を実施する。
4	特別活動 重点3	目標	<ul style="list-style-type: none"> ・ 児童生徒会執行部活動の活性化 ・ 児童生徒が書籍に触れ、学習や余暇活動につなげる機会を増やすための図書環境の充実
		計画	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「あいさつ運動」について放送やポスター等で呼び掛け、参加を促す。 ・ 児童生徒会執行部がアンケートや話し合いを行い、児童生徒が主体的に参加できる新しい行事を企画し、実施する。 ・ BOOK TALK(本の紹介活動)の紹介コーナー設置、来室者数が一目で分かるような掲示等を新たに作ったり、委員会活動を通して生徒自身がアイデアを出したりして、来室者を増やすための図書室づくりに取り組む。
5	その他	目標	<ul style="list-style-type: none"> ・ 児童生徒の成長を分かりやすく伝えるための通知票（所見欄）の活用 ・ 特別支援教育コーディネーター等の資質向上及び地域支援及び校内支援の充実 ・ P T A活動や教育振興会等における担当する業務の確認・整理と精選
		計画	<ul style="list-style-type: none"> ・ 通知票（所見欄）の記入方法について共通理解を図るとともに、改善された記入方法について教師や保護者から意見を収集し、さらなる改善につなげる。 ・ 校内特別支援教育コーディネーター連絡会（月1回）や訪問相談前後に事例検討会を行う。 ・ 就学や進学に向けての教育相談や校内支援に必要な情報を校内の教員間で共有し、チームとして児童生徒の指導・支援を行う。 ・ 「庶務」「P T A」「広報」「教育振興会」の四つの業務内容を整理し、分担を明確にする。引継ぎ資料を見やすく分かりやすい様式に整える。

5 今年度の重点課題（学校アクションプラン）

令和4年度 富山県立にいかわ総合支援学校アクションプラン - 1 -	
重点項目	学習活動（研修部）
重点課題	児童生徒の主体的・対話的で深い学びの実現（教員の日常的な学び合いや授業力の向上）
現 状	<p>ベテラン教員の大量退職と若手教員の急増という教員構成の急激な変化にともなう若手教員育成や、新学習指導要領実施における「主体的・対話的で深い学び」という学びの転換への対応から、校内研修を充実させ、教員の指導力を高める必要性が年々高まってきた。</p> <p>そこで、ふだんの授業を見合う「互見授業週間」を設定し、教員の、学校内において同僚の教員とともに支え合いながらOJTを通じて日常的に学び合う姿や、教員自身が能動的・主体的に考えながら、授業力の向上を図る姿を目指す。そうした実践の積み重ねが、児童生徒の「主体的・対話的で深い学び」の実現につながると考える。</p>
達成目標	<p>互見授業の実施や参観が、日常的な学び合いや授業力の向上につながったと答えた教員の割合</p> <p style="text-align: center;">80%以上</p>
方 策	<ul style="list-style-type: none"> ・互見授業週間（2週間程度）を実施し、その後アンケート調査を実施する。 ・参観してもらいたい授業を決め、授業を実施する。 ・授業を実施するに当たり、その授業の目標や評価規準、参観者に見てもらいたい点や相談したい点等を記載した互見シートを作成する。 ・全教員が、互見週間に公開された授業を1回以上参観する。 ・参観者は、本校の授業づくりにおける共通ツール「授業づくり・授業参観シート」に、良かった点や授業者の悩みに対する助言等を記入する。記入したシートは、授業者に渡し、今後の授業の参考にしてもらう。また、校内共有フォルダ内でも公開し、同じ授業の参観者や他の授業の授業者等にも参考にしてもらえるようにする。

令和4年度 富山県立にいかわ総合支援学校アクションプラン - 2 -	
重点項目	進路支援（高等部）
重点課題	生徒が自己理解を深め、主体的に進路選択ができるための進路指導の充実
現 状	<p>生徒の実態やニーズ、居住地、家庭環境等を鑑みた本校の生徒の進路先は多岐にわたり、進路指導部では機会を捉えて情報提供してきた。しかし、生徒が自己理解を深め、主体的に進路選択ができるようにするために、どのように進路指導を進めていけばよいか困っている教員が多い。また、生徒の自己評価と教師や事業所等からの他者評価に開きがあることも多い。</p> <p>そこで、進路に関する学習内容を教育課程上、生活単元学習で扱うことを年間指導計画に明記することにし、計画的に進路指導を進める必要がある。さらに、教師との対話（面談）を通して、生徒が自分の適性に気付き、自己理解を深め、主体的に進路選択できるように支援することが重要であると考ええる。</p>
達成目標	<p>6月や11月に行う校内実習、就業体験の事前、事後学習における生徒との個別面談（事前に1回、事後に1回）の実施</p> <p style="text-align: center;">生徒一人につき・・・年間 計4回</p>
方 策	<ul style="list-style-type: none"> ○生徒自身が校内実習、就業体験を通して自己理解を深めたり、教師が気付きを促したりするための視点（ポイント）を教師間で検討をし、事前、振り返りシートを作成する。 ○自己理解ができるように事前、振り返りシートを用いて校内実習、就業体験の事前・事後学習で生徒との面談を実施する。 ・事前学習では、進路学習で学んだこと、過去の就業体験の課題等を手掛かりに、働くことや生活に関する目標を考える。 ・事後学習では、日誌や写真等を見ながら、自分にとって作業種があっているか、成果や課題は何かなどを振り返る。 ○進路指導部と協力して、生徒や保護者に教材や学部通信等で卒業後の進路先となる事業所の情報を提供する。また、教師には学習会の機会を設定する。

重点項目	特別活動（情報図書部）	
重点課題	児童生徒が書籍に触れ、学習や余暇活動につなげる機会を増やすための図書環境の充実	
現 状	<p>昨年度の図書貸し出し冊数で、5冊以上借りた児童生徒は16名しかおらず、そのうち中学部は1名、高等部は0名で貸し出し冊数が少なかった。また、高等部の生徒の中には、休み時間などに来室しても本を借りずに図書室を出ていく生徒も多くみられた。本校は視聴覚室と図書室を併用しているため、授業で使用されることが多く、図書室として利用できる時間も限られ、それも貸し出し冊数が伸び悩む原因の一つと考えられる。</p> <p>また、学校図書館司書は年間7回程度の来校が予定されているが、書籍の整理が中心となっている。そこで、昨年度から学校図書館司書によるBOOK TALKの取組を行っているが、参加しているのは小学部のみであり、読書活動を広げる活動に生かし切れていない。</p>	
達成目標	① 図書室の利用者 前・後期の各学期に1回以上図書室（視聴覚室）を利用した児童生徒	② BOOK TALK（本の紹介活動）の実施 学部ごとに実施
	全校児童生徒の三分の一以上	学部ごとに年間1回以上
方 策	<p>○視聴覚室廊下壁面に、新たに展示型書架を設置し、エリック・カールの大型絵本や、BOOK TALKの紹介コーナー、来室者数を示すような掲示等を新たに設ける。</p> <p>○来室者の名前や読んだ冊数などが視覚的に分かるような掲示物を作成し、読書カードに記入しなくても気軽に書籍に触れる機会の励みとなるような方法を試みる。</p> <p>○委員会活動で、学校図書館司書と一緒に活動できることや来校日を伝えたり、児童生徒がアイデアを出し合い、利用したくなるような図書室づくりに取り組んだりする。</p> <p>○BOOK TALKの取組を全校児童生徒に紹介する。学校図書館司書とも協力して、児童生徒や教職員に校内の書籍を多く利用してもらえるよう、書籍を手にしやすい本の展示方法を工夫する。</p>	